

# 心理職養成課程の修士学生による自主的勉強会の 試み

○山村裕大・高嶋喜満人・#齋藤光・#竹村奈々美  
(香川大学大学院医学系研究科)

## 研究の目的

筆者らは、所属専攻において、2022年5月～7月に『トラウマ臨床』をテーマに全6回の自主的な勉強会を実施した。当専攻に所属する修士学生から参加者を募り、筆者らを中心とした運営メンバー5名に加え、参加メンバー8名の計13名が参加した。実施内容をTable1に示す。

Table1 勉強会の内容

回数	内容
第1回	トラウマ臨床を専門とする講師による概論講義
第2回	『トラウマインフォームドケア(野坂祐子, 2018)』のグループごとの輪読と考察の共有
第4回	～
第5回	トラウマケアに関する事例検討(講師)
第6回	トラウマケアにおける心理教育のロールプレイ(講師)

本研究の目的は、心理職養成課程において、修士学生が自主的に行う勉強会の意義と課題を明らかにすることである。

## 方法

**研究協力者と手続き** 勉強会に参加した修士学生を対象に google form を用いた質問紙調査を実施し、7名から回答を得た。

**質問項目** 質問紙は、学習内容に関する項目3項目と勉強会に関する項目3項目で構成されていた。それぞれの項目に対して、自由記述で回答を求めた。

Table2 トラウマや勉強会に関する質問紙調査におけるカテゴリー名と回答例

アンケート項目	カテゴリー名	回答数	回答例
1. 今後の学習の進め方	書籍や文献の購読	5	書籍や論文を読んだりする
	学会や講習会への参加	3	学会に参加して学習を進めていこうと考えている
2. トラウマに対する意識の変化	トラウマの視点の獲得	6	事例を読んだ時などにトラウマの視点からも考えることができるようになった
	イメージの具体化	1	よりイメージできるようになりました
3. 学習成果の生かし方	ケース理解・支援への活用	6	トラウマを持つ方への理解や対応に生かしたい
	今後の学習のきっかけ	2	トラウマケアについてより理解を深める第一歩だと考える
4. 勉強会参加理由	トラウマへの興味	3	トラウマに興味があったから
	トラウマ支援への興味	3	トラウマケアについて興味があったため
	勉強会自体への興味	3	新しい取り組みなので、興味があったから
	勉強会の形式への期待	3	学生同士なら、意見交換しやすいと思ったから
5. 参加して良かったところ	安心できる学習の場	5	うまいことを言おうとしなくても大丈夫という安心感があり、前向きに頑張れた
	体験的な学習	4	ロールプレイを行って、トラウマの話題が出た時の自身の関わり方の癖を知れた
	学習テーマ理解の促進	3	トラウマというテーマに対して、今まで漠然としていた理解が多少明確になったこと
	実務経験のある講師の存在	2	実践経験を積んだ講師がいること
6. やりにくかったところ	学習の重要性の再認識	1	改めて勉強するのが大事だなと思った
	討議の形式や方法	5	グループ討議、大人数だと一人一人が意見を言うだけで終わってしまったりするのが難しい
	学習内容活用場がない	2	生かす場所が欲しい
	日時の調整	2	勉強会の時間が比較的遅かったところ

## 結果と考察

それぞれの項目で得られた回答を、KJ法(川喜田, 2017)を参考に分類した。その結果、Table2に示す結果が得られた。

まず、学習内容に関する項目(項目1～3)に関し、勉強会が参加者の自主的な学習の契機となることが示唆された。また、勉強会を通してトラウマの視点の獲得を多くの参加者が認識し、学習内容をクライアントの多角的な理解につなげようとしていることが明らかとなった。

次に、勉強会に関する項目(項目3～6)に関し、学習内容だけでなく、勉強会という形式そのものが参加理由となっていることが明らかとなった。また、評価や判断の入りにくい、安心して意見することができる学習体験や、実践的な内容がプラスに評価されていることが明らかとなった。

一方で、議論の際の時間配分やグループ分けに課題が残されていることが明らかとなり、単なる意見の共有にならないよう改善する必要性が考えられた。また、修士学生のみでの活動には限界もあり、臨床経験や知識が不十分な院生同士では、実践的な内容についての議論が不十分になりやすいと考えられる。そのため、臨床経験のあるファシリテーターを据える等の工夫が必要である。